No.13
発行：10月1日
2020年（令和2年）

羽田ミヤコタナゴ通信

通 信

今年の１月頃から、『新型コロナウイルス』による感染が国外で猛威を振るい出した事が報じられ始め、瞬く間に全世界へと拡散していき、今だに猛威を振るっています。その影響で、私たちの生活も大きく変化し、栃木県内の多くの学校も３月から５月末までの約３ヶ月間臨時休校となり、今までの生活様式と大きく変わっていている時期でもあります。

羽田のミヤコタナゴ再導入プロジェクトも新型コロナウイルスの影響を大きく受けています。今年の２月に開催が予定されていた『ミヤコタナゴ保護増殖検討会』が中止になり、今までの取り組み事項の評価や、今後の計画等について情報等を共有する機会がなくなりました。また、３月に予定していました馬頭高校生の実習を兼ねたミヤコタナゴの産卵母貝となる二枚貝の全数調査や、水路補修等の作業も中止となりました。その後、政府による緊急事態宣言が発令され、５月末まで協議会関係者による活動が、事実上出来なくなり、事業が一時停止した状態になっていました。

『東京オリンピック・パラリンピックの開催までには、何とかミヤコタナゴを水路へ再導入しよう。そして多くの方々に日本の農村文化のすばらしさを体感してもらおう』との思いで取り組んできましたが、新型コロナウイルスの影響で東京オリンピック・パラリンピックも延期され、現実的な計画を立てて物事を進めることが難しいのも事実です。そんな中、羽田についても今年度、最終目的を再度設定し取り組んでいこうという話も聞かれ、それに向けて関係者が一体となって事業を進めていきます。関係者が活動を行う際は、栃木県が示しています『新型コロナウイルス感染症対策』に準じ、感染拡大防止を徹底し、活動を推進していきますので、皆さまのご協力をよろしくお願いします。

例年７月に発行しています本通信につきましても、３ヶ月遅れでの発行となっております。作成期間の都合により、本通信内の記載が未来型で記載されている内容もありますが、ご了承いただきますようお願いいたします。結果につきましては、次回の通信で報告させていただきます。

トピック

1 羽田沼 ～ 過去の記録より ～　その１

2 今年度の活動について

3 今年度から本格始動します!!

ありし日の長者ヶ池
～ 羽田郷土誌より ～

発行元：羽田ミヤコタナゴ再導入に向けた協議会
発行事務局：農村環境クリエイト

1　羽田沼 ～ 過去の記録より ～　その1

物事を進めるにあたり、過去の情報を得ることも必要となってきます。羽田ミヤコタナゴ再導入プロジェクトについても、過去の状況等が詳細に記録されている文献等が無いか調べていたところ、羽田郷土誌刊行委員会が１９９５（平成７）年６月１日に発行した『羽田郷土誌』に羽田沼についての記載がありましたので、池の由来から人々との関係、生息していた生物について、一部抜粋にて２回に分けて紹介させていただきます。

羽田が日本で最初に生息地保護区に指定されましたのが平成6年12月ですので、その半年後に発行された文献です。

（1）池の名前

江戸時代の黒羽藩主大関増業が文化年間に著わした『創垂可継』の「封域郷村誌」の中に「**大溜池**」という名が見えている。明治２８年になった『地誌編輯材料取調書』の中に「**鏡池**(かがみがいけ）」また「**芦池**（あしのいけ）」と記録されている。鏡が池の名があったのは、殺生石で有名な金毛九尾の狐の伝説に出てくる鏡が池が、この羽田の池であったという伝えが古くからあったからである。明治の頃までは、池に芦が生えていたので、芦の池と呼んでいた。

長者が池という名称は明治以降に付けられたものである。

長者ヶ池（羽田沼）

（2）位置・面積

所在地：大田原市羽田西の内、羽田小学校の西側に位置している。

面　積：4.7ｈａ（ヘクタール）

（3）歴史

今も池の西側一帯を「長者平」といっていて、そこは長者が住んだ跡だったという伝えが残っている。明治以前までは、今のように桜の植えてある南側の高い土手はなく、池の水がふえるとあふれて下に流れ出し、池沢にいく本もの自然に出来た小川を作っていた。その小川は近年まであったが、現在は一本の堀にまとめられている。また、今も土手の下には、やじ（湿地）の跡がわずかに残っている。水が少なくなる夏に池の北端に行くと、清水がふき出ているのが見られて、那須野が原台地（扇状地）の「湧水」によって、この池の水が形成されていることがわかる。

池の桜

明治頃までは、池のまわりには古桶のような太い松や、「しゃあなし※」などの木が茂り、水面には「じゅんさい」が一面にはっていた（生育していた）。明治初年の頃に、現在の南側の堤防の役目をしている土手が作られた。それで「新土手」といった。それまでは、この土手のあたりは低地で、毎年水がふえると流れ出していた。それで池の北側を三畝（約300㎡）くらい六尺（約1.8m）の深さに掘り下げ、その土を運んで土手の土にした。※正式名称がわかる方はお教えください。お願いします。

大正時代に桜の木が植えられた。

以上のようなことから、池はもともと長い年月にわたって自然の湧水が次第に溜まり、それと同時に、泥をおし流しながらできた自然の堤によって沼の形に広がっていったと考えられる。そして村の人々が池の水を利用するにつれて、堤防を作る作業が、初めは小規模だが幾度もくり返し行われて、現在見られるような形になったと思われる。

（4）池の水

池から村には、深く長い堀を通して水が引かれていて、現在も利用されている。その堀は小高い山を切りくずして作られていて、そこを昔から地獄堀と呼んでいる。それには次のような伝えが残っている。

ここは昔、黒羽の殿様が、村に田を作るために引いた堀で、村人は義務人夫となってかり出された。役人の使い方は荒く、そこで働かされるのは、まるで地獄へでも行ったようだと村人たちは言い合った。その昔、羽田の部落は年貢米がなかったので、領主が村に水を引き田を作るために堀をほった。堀人夫は罪人が働かされた。罪人は死んでも生きてもかまわないように使われた。罪人が死ぬと掘っている所へ一緒に埋められた。

いずれも年代は明らかではないが、羽田は長く黒羽藩大関氏の所領であったので、大関氏が治めていた時代の出来事であろうことは推測がつく。明治に至るまで羽田は大関氏の属領だった。

この堀を作る設計者は、本村（羽田字若林）の松本岡右衛門だという伝えが残っている。当時は今のように機械力はなく、人力で行ったから、何年も何ヶ月もかかった。相当に困難な事業であり、伝説に伝えられているような労働内容であったろうことは想像される。その結果、羽田村に水が引かれ、文化１４（１８１７）年頃、村の田の２／３の約４haをうるおすことになった。

地獄堀

『羽田郷土誌』より抜粋

2　今年度の活動について

『通信』でも記載しましたが、新型コロナウイルスの影響により、今年２月中旬より7月上旬までの約５か月間、十分な活動が行えませんでした。やっと7月１０日、８月５日にそれぞれ３密対策を講じながら今年度の活動内容について、関係者と打ち合わせが実施できました。その際に決まった今年度の主な実施計画についてお知らせします。なお２回の打ち合わせで検討・決定した事項は、１０月までの活動についてです。それ以降の活動についても大まかな計画を決定しましたが、今後の状況変化等を踏まえ、より詳細な計画につきましては、今後定期的に開催する地元打合せで、随時決定していきます。

令和２年２月１４日の会議の様子

５か月後

令和２年７月１０日の会議の様子

令和２年８月５日の会議の様子

（１）水路等生息環境等の整備

例年、羽田ミヤコタナゴ保存会や水利組合が中心となって行っている水路補修や、羽田沼からの取水について、より一歩進んだ作業を行います。

１）試験放流区間の再整備

平成２３年より様々なデータを収集し、何が問題でどのように対処すればミヤコタナゴの再導入が現実的になるかを検討してきました。その結果、「生息水路全体を同じように整備するのではなく、ミヤコタナゴやマツカサガイの生育に適した区間を、重点的に整備したほうがよいのではないか」、との意見がありました。今後、栃木県水産試験場の意見を参考にし、水路の整備範囲を決定します。

２）羽田沼からの取水について

羽田沼からの取水について、もう一歩踏み込んだ対策を行います。今までは水が不足するとハンドルゲートを操作し、沼底より約３０㎝程度のところから水を取水していましたが、平成２９年２月に設置した選択取水用の２箇所の穴にゲートを設置し、今後はそのゲートを操作することにより取水を行います。ゲートの設置は今年行われる羽田沼の干し上げ期間中に実施し、沼干後より取水方法が変わります。さてどれほどの

効果があるのか、関係者は期待を大きくしております。

３）羽田沼の干し上げ作業

例年実施しています羽田沼の干し上げ作業を今年も実施します。実施期間は次の通りとなります。

開始：８月３０日（日）１０：００に羽田沼取水塔の底樋を開放し地獄堀へ水を流します。生息水路へは泥が流入しますので羽田沼からの水は流しません。

終了：１０月４日（日）に羽田沼取水塔の底樋を閉鎖し湛水を開始します。湛水後は今回設置した選択取水ゲートより取水を開始し、生息水路へは必要量の水を流します。生息水路へ流す水の量については、営農の状況や生息水路の環境を総合的に判断し、以前生息水路上部へ設置した三角堰の水深により管理する計画です。

（２）生息水路の魚類相調査

今年から馬頭高校水産科生徒の実習の一環として魚類相調査を行う事が計画されていましたが、新型コロナウイルス対策として密を避けるため規模を縮小し、限られた関係者で実施します。実施予定日は９月１７日（木）の午前中に実施し、荒天時は次週の９月２４日（木）に延期します。

3 今年度から本格始動します!!

昨年に引き続き今年度も羽田小学校５年生児童と馬頭高校水産科の生徒による生息水路の調査を実施します。昨年度は９月からの開始でしたが、今年は６月から開始しました。保存会の関係者、協議会の関係者を交えながらの水質調査を計画しています。なお今年の水質調査の日程は次の通りです。今年はどんな発見があるか楽しみです!!

第１回　６月１８日（木）５、６時間目
第２回　９月１７日（木）３、４時間目
第３回　１０月８日（木）５、６時間目
第４回　１１月５日（木）５、６時間目
第５回　１月２１日（木）５、６時間目
第６回　２月２５日（木）５、６時間目

上記の写真は令和２年１月１６日の時の授業の様子です。自分たちで水質の状態を確認し、結果について取りまとめていきました。継続して実施することで、何かがきっと見えてきます。

６月に行われた今年度第１回目となる水質調査（授業の様子）について皆さんへ紹介します。

第１回　６月１８日（木）

５時間目：羽田ミヤコタナゴ生息地について学ぶ（理科室）

第１回目の授業ということもあり、高校生も児童の皆さんも最初は緊張した様子でしたが、高校生が準備してくれた学びやすいプリントを進めていくうちに緊張もほぐれ、いろいろな意見が出てきました。５時間目は、ミヤコタナゴが生息している地域の環境について学びました。

６時間目：ミヤコタナゴの生息環境について学ぶ（生息水路）

身近に生息地保護区があることの利点を活用した授業です。生息水路の環境や水路内に生息している生き物を観察し、水質調査を通してどのような改善提案ができるかなど、真剣に観察していました。

6月18日

2．羽田生息地ってどんなところ！？

①（　　）年にミヤコタナゴが発見され、当時はマツカサガイがたくさんいた。

→平成６年、生息地保護区（生物を守るために指定された場所）に指定

②羽田沼（農業用貯水池）と農業用水路、その周辺の水田からなる保護区。

羽田沼の水源は（　　）。

③平成７年には（　　）匹のミヤコタナゴが調査で確認されたが、平成14年からは生息が確認できなくなった。

→ここで考えてみよう！なぜミヤコタナゴはいなくなってしまったの？

3．地域の人々がミヤコタナゴを復活させた！

その１：保存会を中心に水路の修復や維持管理作業が行われた。

その２：羽田小学校や水産試験場で育てたミヤコタナゴが放流された。（平成25年）

↓その結果

成果：放流した個体が水路で泳いでいる姿が見られるようになった。

課題：個体数が増えない。（自然環境の中で子供が生まれない、翌年の生存数が少ない。）

4．これからのミッション！

①水質調査を行い、季節的な水質の変化を観察する

②ミヤコタナゴや淡水二枚貝に良い水質や環境について考える

地域の皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。

問い合わせ先：大田原市教育委員会事務局文化振興課文化財係
TEL 0287-23-3135
FAX 0287-23-3138
E-mail　bunka@city.ohtawara.tochigi.jp